テキスト抜け、SSのトリミングや貼付位置の甘さがありますがご容赦願います。

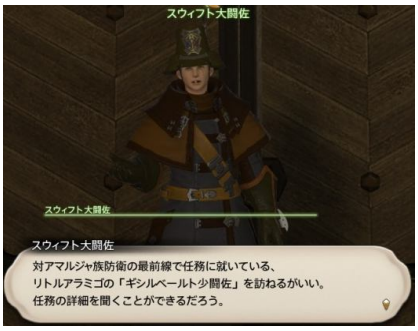
FF14　備忘ログ(PATCH2.1)　蛮族ストーリークエスト

アマルジャ編

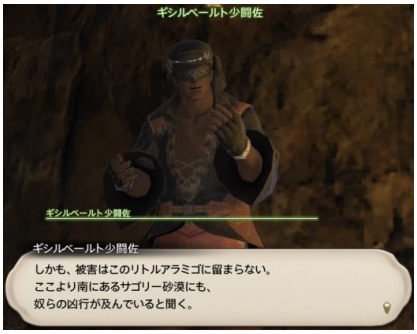
©2010－2014 SQUARE ENIX CO.,LTD.All Rights Reserved. FINAL FANTASY XIV

荒野に逆巻く騒擾

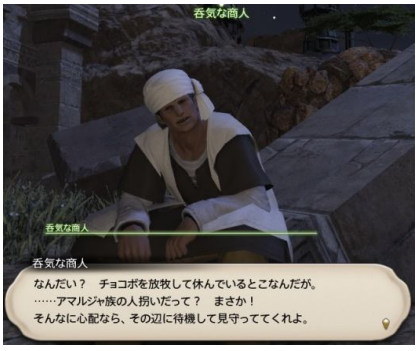
スウィフト大闘佐 ： よくぞ来た、◇◇◇少闘士。貴公を歴戦の強者と見こんで、ある任務を任せたい。一筋縄ではいかぬ、危険な任務だ……。
このザナラーンは、アマルジャ族の被害に頭を痛めている。
貴公によって、蛮神「イフリート」の復活をくじかれた後、ヤツらは一時期、鳴りを潜めていた。
しかし最近……再び、活発な動きを見せておるのだ。
……「人拐い」の被害も、以前より多く報告されている。これは、もはや看過できない大問題だ。
そこで貴公に、アマルジャ族についての調査を依頼したい。
対アマルジャ族防衛の最前線で任務に就いている、リトルアラミゴの「ギシルベールト少闘佐」を訪ねるがいい。
任務の詳細を聞くことができるだろう。



ギシルベールト少闘佐 ： よくきてくれたな。スウィフト大闘佐から話は聞いている。さっそく、任務の詳細を説明しよう。
アマルジャ族の動きが活発化していることは聞いているな？　最近、この南ザナラーンでは、
商隊や旅人が襲われ、拐われる被害が多発しているのだ。
近ごろでは特に手口が荒っぽくなり、白昼堂々、凶行が行われる始末だ。
しかも、被害はこのリトルアラミゴに留まらない。ここより南にあるサゴリー砂漠にも、奴らの凶行が及んでいると聞く。
冒険者よ、まずは「人拐い」の現場を押さえ、アマルジャ族どもの尻尾を掴むぞ。
現在、リトルアラミゴ周辺で小休止中の商隊がある。まずは、その様子を見てきてくれないか？
何かあったら、その時は頼む！



呑気な商人 ： なんだい？　チョコボを放牧して休んでいるとこなんだが。……アマルジャ族の人拐いだって？　まさか！
そんなに心配なら、その辺に待機して見守っててくれよ。



灰塗りのアマルジャ族 ： 油断大敵、乾坤一擲！

アマルジャ族の雑兵 ： 不覚！　き、貴様ら……「灰の一党」かッ!?

灰塗りのアマルジャ族 ： いかにも。多勢に無勢なりとも、あに後れをとるべけんや！

アマルジャ族の雑兵 ： 背信棄義っ！　道連れなりっ！

異装のミコッテ族 ： 背後から敵に刃を向けるたぁ……　てめぇら、それでも誇り高き高祖の血を引く兵（つわもの）かっ！？

灰塗りのアマルジャ族 ： 兵は詭道なり。敵を知り、己を知れば百戦危からず。これ兵法の第一義なり。
名うての冒険者とお見受けする。此は我が戦、手出し無用！

ハムジ・ガー ： 我は戦鬼、ハムジ・ガーと覚えておいて頂こう。……我らは「灰の一党」。炎獄で燃え盛る炎より生まれし、一握の灰燼を成す者なり。
ヒトの子よ、戦士として貴君に興味あり。特別に我が巣「灰の陣営」に招待いたす。合縁奇縁、一期一会、お待ち申しておるぞ。

呑気な商人 ： うひゃあ、助かった！　それにしても、アマルジャ族をアマルジャ族が攻撃ねぇ。もしかして……仲間割れか？

ハムジ・ガー ： 我が招きに応え、よくぞ参られた。此は「灰の陣営」。我が長を務めし「灰の一党」の居留地なり。
我ら「灰の一党」は、至強の高みを求め、遊牧の民にして武の民なる、高祖の血と心を継がんとする者。
強き者には、例えヒトの子とて相応の礼を尽くすものなり。
ふむ、その只ならぬ気配……　もしや貴君は焔神を退けし、噂の冒険者では？
……我に本旨は解らぬが、その身に纏う気迫は真。なれば貴君も感じよう、我らが同胞の堕落ぶりを。
戦に死するを本望とせし、武勇の民たる矜持を忘れ、今や弱者を拐い、古の神に捧げて祝福を得んとする始末……。まさしく厚顔無恥！
昨今、我らが同胞の堕落には目を見張るばかり。かつて戦に生き、戦に死するを本望とした、
誇り高きアマルジャ族の矜持は、今や泥に塗れて見る影なし。
剣すら持たぬ弱き者を拐い、古き神に捧げ祝福を得んとするは、その最たる行為。まさしく笑止千万！
我らは「ザンラク」に集う、堕落せしアマルジャ族を狩る者。貴君にその意思あらば、いざ我ら「灰の一党」と共に戦わん！

？？？？ ： ちょっと待てよ。そいつぁ聞き捨てならねぇな！
異装のミコッテ族 ： オメェ、本当にイフリートを倒した英雄なのか？　……フン、ホントかどうか眉唾モンだな。
そう吹聴したヤロウを、俺はもう10人は斬り殺してるぜ？

ハムジ・ガー ： 戦士ルーン・ガーよ、口出し無用。一党の意思は、このハムジ・ガーが決めるものなり。

ルーン・ガー ： ……おいオメェ、いいか？　足手まといにはなるなよ！　ただでさえ、数だけは多い「ザンラク」の連中相手に、
こちとら手ぇいっぱいなんだからなっ！

ハムジ・ガー ： 焔神を倒し者が貴君であるか、知る術はなし。されど貴君からは、只者ならぬ気配を感じる。このハムジ・ガーの目は節穴にあらず。
貴君の目的は、ヒトを拐うアマルジャ族の打倒なりや。ならば我らに組すること、すなわち貴君の易でもある。
まずは我らに協力し、しかるのち意を決めるがよかろう。
敵は「ザンラク」のアマルジャ族！　弱者を糧に古き神にすがる、きゃつらの牙を共に折らん！　旗幟鮮明、確乎不動！

灰燼を成す者

ハムジ・ガー ： 我らアマルジャ族は、大平原「パガルザン」を巡りて暮らす遊牧の民にして、旅路をさえぎる敵あらば、力で征す武勇の民なり。
古来より、死期を悟ったアマルジャの戦士は、ここ聖地「ザンラク」へと向かい、死に相対して参った。
鍛えし魂を劫火にくべ、肉体を灰に帰すことこそ我らが本懐！
されど、「ザハラク」に集う者どもは死を恐れ、己を鍛えず、安易に神の加護を得んとするばかり……。
神にすがるは、これ即ち己の弱さ！
あまつさえ、剣すら持たぬ弱者を襲い、これを拐いて、古き神に捧げるとは言語道断！
至強とは、強きに勝ち、己に勝ってこそのものなり！

ヤドヴ・ガー ： 我が長ハムジ・ガー、焦眉之急！　「炎牙衆（えんがしゅう）」、凶行に及びたる模様！　直ちに征討に赴かれたし！

ハムジ・ガー ： む、冒険者よ……今まさに貴君の出番なり！　「炎牙衆」こそ我らが宿敵、惰弱なるアマルジャ族ぞ。……戦士ルーン・ガー！

ルーン・ガー ： 何の用だよ？　ハムジ・ガーの親父。

ハムジ・ガー ： これなるは、戦士ルーン・ガーと申す者。姿かたちはミコッテ族なれど、その魂に炎を宿す同志なり。
我ら「灰の一党」が求むるは至強のみ、種や性に別なし。
戦士ルーン・ガー。冒険者を補佐し、共に敵にあたるべし。

ルーン・ガー ： はぁぁぁ！？　ちょ、ちょっとまてよっ！　なんで俺が、こんなヤツと……！　誰かほかのヤツにしろよ、いんだろ？　ほかに！

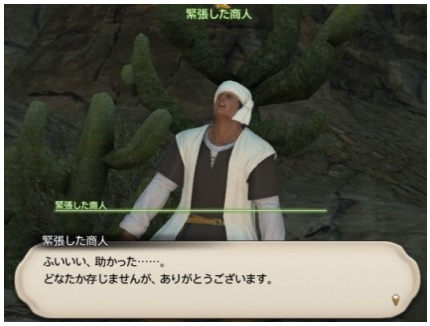
ハムジ・ガー ： 問答無用！　このハムジ・ガーの決定に否は許さじ！　言い訳あらば剣で聞くが如何？

ルーン・ガー ： ……チッ。しょうがねぇな……。
オイ、さっそく、化けの皮が剥げる機会がきたな！　地図に印をつけてやっから、現地で合流すんぞ。さっさと行け！

ルーン・ガー ： 遅せぇぞ、何やってたんだ！　斥候は俺が片付けた！
この装備……やはり敵は「炎牙衆」か。気を抜くな、まだ近くに本隊がいるぞ……！
オメェは「指定地点」で待機し、敵を迎え討て！

緊張した商人 ： ひいいい……助け……助けてぇ……！

緊張した商人 ： ふいいい、助かった……。どなたか存じませんが、ありがとうございます。
ここいらでは、アマルジャ族の人拐いが横行していましてね。一時期、鳴りを潜めたと思っていたのですが……
最近、以前にも増して被害が増えているようなんです。
次からは、腕利きの冒険者を護衛に雇うことにします。ううう、経費がかさむなぁ……商売あがったりだ……。



ルーン・ガー ： フン、死に損ねたみてぇだな。さっさと「灰の陣営」に帰るぞ……道草食うなよ！

ルーン・ガー ： オメェの実力は、たっぷり見させてもらったぜ。……あっ、でも調子に乗んじゃねぇぞ！
戦士としての覚悟と決意は、俺の方が上だかんな！
俺たち「灰の一党」は、孤高の戦闘集団。長のハムジ・ガー主導のもと、ザンラクに巣食うアマルジャ族と敵対してんだ。
アイツらは、この聖地のあちこちに祭壇や戦陣を築き、我が物顔でのさばってやがる。
フン、まともに戦えもしねぇ卑怯者のくせに……。
さっき商隊を襲ったのは「炎牙衆」と呼ばれる、ザンラク勢の中でも人拐いを専門とした集団だ。
……そして、俺たち「灰の一党」の宿敵でもある。
ヤツらの野望を潰し、一網打尽にする……！　それが俺たち「灰の一党」の目的であり、正統なるアマルジャ族の戦士の使命なんだ。
……オメェに忠告だ。俺たちの問題に首を突っ込むのは、ほどほどにしろ。アマルジャ族でもねぇヤツが、深入りすんじゃねぇ！
……あン？　オメェの表情、「お前だってアマルジャ族じゃないクセに」って顔だな？　ウダウダ言うようなら、ブッ飛ばすぞ！
さっさと、ハムジ・ガーの親父に戦果を報告してきやがれってんだ！

ハムジ・ガー ： 強き者よ、聞きしに勝るその手並、実に見事なり。まさに八面六臂、一騎当千。このハムジ・ガー、戦士として感服いたした。
貴君にその意思あらば、我ら「灰の一党」の同志となりて、ザンラク勢との対決に、助太刀願いたき所存。
貴君にその意思ありや？

……いや、遠慮させてもらいます。

ふむ……それは至極残念。しかし、貴君には貴君の道があろう。たとえ袂を分かつとも、我らの志は変わらず。

もちろん！　共に戦う所存！

うむ！　よくぞ言った、強き者よ！
我ら姿かたちは違えども、倒すべき敵は同じ。即ち、不倶戴天たる「炎牙衆」ぞ！　願わくは、共に彼奴らの野望の炎をかき消さん！

孤独なる復讐

ハムジ・ガー ： ……貴君。南方のサゴリー砂漠に「忘れられたオアシス」なる、猫どもの隠れ里があるのをご存知か？
先刻、戦士ルーン・ガーより急報あり。オアシスの猫どもが、卑怯なるザハラク勢の強襲を受け、
その多くが打ち倒され、連れ拐われたとのこと。
猫どもはその殆どが鏖殺され、連れ拐われたり。だがしかし、九死一生、遁走に成功せるもの有りと聞く。
……我らに猫どもを助ける義理はなし。なれど、敵が「炎牙衆」とあらば、これ看過できぬ憂患。
勇み立ちて干戈を交えること、やぶさかでなし。
そこで貴君に頼みたい。ここより南西、敵地ザンラクに急ぎ向かいて、ルーン・ガーと合同し、死に損ないの猫を助けよ！

ルーン・ガー ： オイオイオイオイ！　確かに「応援を頼む」って報せを送ったが……　よりにもよって、オメェかよっ！？
……だが、一足遅かったようだぜ。隠れていたはずのミコッテ族が、いなくなっちまった。
「炎牙衆」どもに見つかり、連れ拐われちまったんだ……。
拐われた先は、きっと「ザンラク脇本陣」。奴らの前線基地だ。
……フン、いい作戦を思いついたぜ。オメェに、このドレイクを貸してやるよ。こいつに乗って「ザンラク脇本陣」に向かえ。
アマルジャ族は、かがり火を焚くのに油を使う。「燃油の樽」に、ドレイクの炎息を吹きかけて燃やすんだ。
相手が爆発に気をとられている隙に、俺は囚われたミコッテ族を助け出す。
陽動作戦が成功したら、砂漠の入口あたりに集合だ！

ウ・ナパ ： ああ、助かった……。狩猟中に突然襲われ、反撃する間もありませんでした。それにしても、助けてくれた彼女……もしかして……。

ルーン・ガー ： フン、遅かったな。てっきり火に巻かれて、燃えカスになったかと思ったぜ。……まぁ、俺としては、その方が清々するけどな。

ミコッテ族の商人 ： ル、ルーンちゃん？　……あなた、もしかして……ウ・ルーンちゃんじゃない！？　生きてたなんて……てっきり死んだかと……。

ルーン・ガー ： ……フン。

ミコッテ族の商人 ： 間違いないわ、その声……私を憶えてないの？　オアシスで一緒に育ったお姉ちゃんよ！

ルーン・ガー ： ……うるせぇ、誰だオマエ？　俺はルーン・ガー、誇り高き「灰の一党」の戦士だ。
姿はミコッテ族でも、心はアマルジャ族。……悪いが人違いだな。
俺は陣営に戻るぜ。……オメェはコイツをなんとかしな。終わったら、道草しないで帰ってくんだぞ！

ウ・ナパ ： ありがとうございました、もう大丈夫です。私も、誇り高きウ族の狩人。ひとりで家路につくことくらいはできます。
……冒険者さん、よろしければ、この後、オアシスにいらしていただけませんか？
彼女……ウ・ルーンちゃんのことでお願いがあるのです。

ウ・ナパ ： 冒険者さん、お待ちしておりました。……あれは間違いなく私の知るルーンちゃん。
きっと彼女の行動には、何らかの理由があるはず……。
彼女はこのオアシスの出身……仲間たちからなら、ルーンちゃんについて、何か話を聞けるかもしれません。
どうか、彼女の力になってあげてください……。

涼し気な目元の狩人 ： ウ・ルーン？　知っているわ、姉妹だもの……。私たちは先代族長の娘。
ほかにもたくさんの姉妹がいるし、母親は違うんだけど。
でも、ウ・ルーンに会おうとしても無駄よ。彼女は5年前、不幸な事件で母親とともに亡くなったの。
今でも忘れない、あれは悲しい出来事だったわ……。

目つきの鋭い狩人 ： 我々オアシスのウ族は、アマルジャ族と、何度も小競り合いをしているの。
奴らは、私たちの大切な狩場に入ってきては、何かと邪魔をするからね。まったく迷惑な連中よ。

厳しい顔つきの狩人 ： ウ・ルーン？　ええ、憶えてますとも……。虫も殺せない、それはもう大人しい女の子だったわ。
あの子を奪ったアマルジャ族を、私は許さない……。

甘い香りの狩人 ： 狩りに出ていた仲間が、アマルジャ族に襲われたらしいの。まだ帰ってきていない者も多いらしいわ……なんてヒドイ。
まるで、5年前の悲劇の再来ね……。

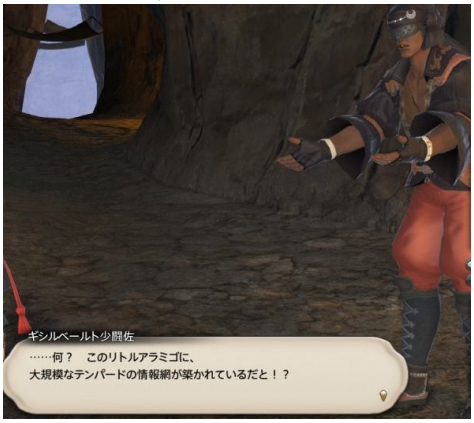
ルーン・ガー ： ……遅かったな。さては、オアシスのミコッテ族から何かくだらねぇ噂話を聞いたんだな？　フン！
俺の顔を見な……。この仮面は、ハムジ・ガーより授かったアマルジャ族の面。そして誇り高き戦士の象徴だ。
あのとき……5年前、アマルジャ族に襲われたときのこと。死にかけて砂漠を彷徨っていた俺の前に、
ハムジ・ガーは突然現れ、そして言った……。
「死ぬなら捨ておく、だが生きるなら戦え」……と。
それ以来、俺は家族を、氏族を……　いや、種族をも捨て、過去のすべてを捨て去ったんだ。
そして生まれ変わった、復讐に燃える戦の鬼として……。
この仮面はその証。俺が誇り高きアマルジャ族の戦士として、生きていくための……。
……フン、くだらない無駄話をしちまったな。感傷は弱さ、弱さは戦士の大敵……俺もまだまだ未熟か。
さっさとハムジ・ガーの親父に報告してきなっ！

ハムジ・ガー ： 強き者よ、我ら「灰の一党」は、古のアマルジャ族の有り様を今に伝える者なり。
古の有り様……すなわち己を鍛え、誇り高く死すこと。神にすがらず、弱きを攻めず、己の魂と肉体を磨きて、ひたすらに至強を求むる。
我らは戦鬼、修羅の道を歩む者。神を敬いこそすれ、すがり頼るを拒む者。その決意、しかとその魂に刻みつけるべし！

反逆の焔

ハムジ・ガー ： 我らが斥候が、憎き仇敵「炎牙衆」の蠢動を察知せり。きゃつらは拐った捕虜をテンパード「焼かれし者」と成し、
その傀儡を操りて、次なる襲撃の謀を巡らさんと聞く。
今までに我らが挫きし数多の「人拐い計画」は、おしなべて其のテンパードの情報網が元凶なり。
権謀術数は根より絶つ！　追根究底、抜本塞源！
貴君「リトルアラミゴ」はご存知か？　……彼の地こそ「焼かれし者」の伏魔殿。
きゃつらは民草に紛れて跋扈せし獅子身中の虫なり。
強き者よ、貴君は幸いにしてヒトなり。我らアマルジャ族が叶わぬ、人里への潜入を求む。
「リトルアラミゴ」へと赴き、テンパードを探るべし！

ギシルベールト少闘佐 ： ……何？　このリトルアラミゴに、大規模なテンパードの情報網が築かれているだと！？
なるほど、確かにそう考えると辻褄が合う……。奴らは、商隊のスケジュールを、かなり正確に把握している。
内通者がいれば、情報を得るのも容易だろう。



不滅隊闘軍曹 ： し、少闘佐殿！　アマルジャ族の人拐いどもに、キャリッジが襲われたとの報告が入りました！

ギシルベールト少闘佐 ： チクショウ、トカゲ野郎めっ！　またなのか！　今月に入って5回目だぞ！？
くっ……ただでさえ人手が足らないというのに！　お前は、今すぐ手勢を集めて現地に向え！
リトルアラミゴにいる不滅隊を、集められるだけ集めろ！
……すまないが、お前も助太刀を頼む！　虎の子が出払い、新兵ばかりで戦力が心もとない。
アマルジャ族に大挙してこられたら、ひとたまりもないぞ！

不滅隊闘軍曹 ： ぐっ！　はぁはぁはぁ……　……ギシルベールト隊長……すみません……！

不滅隊の兵卒 ： あん？　なんだ、てめぇは？　ははぁん、ギシルベールトのよこした冒険者か。
一足遅かったなぁ……たった今、あいつの部隊は全滅したぜ？
くくくっ、キャリッジの襲撃情報なんて真っ赤なウソ！　てめぇらは、俺の流したニセの情報に釣られたってわけさ。
まさに愉快痛快、痛快無比……おっと、口癖が移っちまった。

不滅隊闘軍曹 ： ぐっ……貴様、先日入隊したばかりの……。貴様が裏切り者だったのか……！　……誇り高き不滅隊に、まだ裏切り者がいたとは……！

不滅隊の兵卒 ： 誇り高き不滅隊……？　くくっ、笑わせるぜ！　もとより、俺は焔神「イフリート」様に仕える者！
それに「炎牙衆」は、金払いがいいお得意様だ！
これで、リトルアラミゴに駐屯する不滅隊はしばらく動けまい。当分、俺たちのシノギも楽になるってもんよ！
捕まえた隊士どもは、焔神様に仕えてもらうぜ。
うん？　てめぇ、まだいたのか。……なんだ、やろうってのか？　じ、上等じゃねぇか！
周囲には「炎牙衆」の部隊が控えているんだ！　それに、まもなく本隊も到着するはず！
俺をやろうってんなら、「炎牙衆」を敵に回すことになるぞ！
ほほほ、本気でやろうってのか！？　え、炎牙衆のみなさーん！　出番ですよー！

不滅隊の兵卒 ： なっ……つ、強ええっ！！　てめえ、何者なんだっ……！？
ここここ、こんなはずじゃ……。あ、あはははは、ごめん！　ちょ、ちょっと待って……！
もう少し待てば、「炎牙衆」の本隊がくるから……っ！
ヒイイイイ～～～ッ！　「炎牙衆」さぁん、助けてええええっ！！

ルーン・ガー ： オイ、◇◇◇！　オメェ、何やってんだ！？　無事かっ！？

猛々しきアマルジャ族 ： ぐふふふふ、天網恢恢（てんもうかいかい）。網に思わぬ虫が掛かったようだ。
「灰の一党」……。崇高なる焔神に背く、アマルジャ族の面汚し。
時代錯誤の亡霊どもめ。いつからヒトに飼い慣らされた？

ルーン・ガー ： て、てめぇは……ザゴズ・テー！！

ザゴズ・テー ： ぐふふふ、貴様は確か……ルーン・ガー。その姿は如何した？　アマルジャ族の軍門に降ったか。

ルーン・ガー ： うるせえっ！　拐った人たちを、どこへやりやがった！？

ザゴズ・テー ： 時すでに遅し、獲物はすでにザハラク戦陣なり。抵抗せし者はことごとく殄殺。我ら「炎牙衆」、刃向かう者に情けはかけん。
ぐふふふふ……。ヒトは皆、ヒーヒーとカワイイ声で鳴く。5年前に殺した貴様の母親も……な！

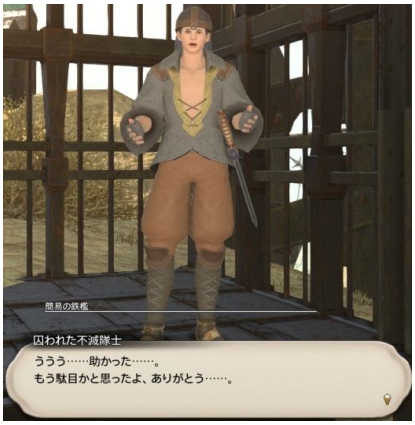
ルーン・ガー ： ザゴズ・テエエエエエエエッ！！
ぐ……うっ！！　ば、馬鹿なっ……その……ち、力は……！？

ザゴズ・テー ： ぐうっふっふっふ！　どうした灰の一党！　至強を標榜したところで、所詮はその程度か！？
イフリート様の加護を受けた、我が魔力は無敵ッ！
戻り、ハムジ・ガーに伝えるべし！　燃えつきた灰に価値などない。虚しくザンラクの熱風の前に、散りゆくがいい……と！

不滅隊闘軍曹 ： はぁはぁはぁ……助太刀、痛み入る……　ギシルベールト隊長に……報告せねば……。
頼む……私の代わりに、報告してきてくれないか……。

ギシルベールト少闘佐 ： 聞いたぞ……！　なんてことだ！　我ら不滅隊の中に、裏切り者……　テンパードの情報網を敷いた犯人がいたとは……。
小隊が全滅し、残りの隊員も連れ拐われてしまった。奴らの狙いは、最初から我々不滅隊だったのか……　くっ、完全にしてやられた……。
恥を忍んで、お前に頼みがある……。拐われた部下たちを助けてほしい。私の部隊は、当分、動けそうもないからな……。

ハムジ・ガー ： 話はしかと聞き及んだ！　きゃつは「炎牙衆」の首魁、ザゴズ・テー！　その目的は「焼かれし者」を生み出すことなり。
祈る「焼かれし者」増えれば、自ずと蛮神は勢いを増し、神を拝する祭壇の炎は、ザンラクにいるアマルジャ族に特別なる加護をもたらす！
きゃつらの野望の炎、速やかに消し去るべし！　直ちに拐われた者を助けん！　捕虜を囲いし牢の鍵は、脇本陣周辺の衛士が持たん！



囚われた不滅隊士 ： ううう……助かった……。もう駄目かと思ったよ、ありがとう……。

囚われた商人 ： 助かった……相手が不滅隊だったから、すっかり信用しちまったよ。まさか、ヒトに裏切り者がいたなんてな……。

囚われた市民 ： 祖国を追われたうえに、こんなとこで蛮族に囚われて……。俺ってなんて不幸な男……。ううううっ。

囚われた冒険者 ： 寝ているところを、いきなり拐われちまって……　気づいたら檻の中さ。……ところでリトルアラミゴはどっちだ！？

ハムジ・ガー ： 見事なり！　強き者よ。死地と化したる「ザハラク戦陣」を踏み超え、任務を遂行せし貴君の姿、正に英俊豪傑なり！

？？？？ ： 戦士ルーン・ガー！　しばし待たれよ！　どうするつもりだ！

ルーン・ガー ： 決まってんだろうがっ！　アイツの……ザゴズ・テーの息の根を止めてやんだよ！
母さんに手をかけた……アイツだけは……ゼッテェにっ！！

ハムジ・ガー ： 戦士ルーン・ガー、己の器をわきまえるべし。今の貴様の力では、ザゴズ・テーを討ち勝つことあたわず。
これすなわち蟷螂之斧、行かば犬死は必定なり。

ルーン・ガー ： 教えてくれ、親父っ！　それは……それは、俺がミコッテだからか……？
ミコッテはどうやっても、アマルジャには勝てねぇってか！？

ハムジ・ガー ： 愚問なり……！　貴様は戦士として、まだまだ未熟。ただ、それだけのこと。

ヤドヴ・ガー ： ハムジ・ガー！　同胞の恥は己の恥！　ルーン・ガーを援け、戦うことをお許し頂きたい。
一党の全戦力を挙げ、今こそ「炎牙衆」に反撃の嚆矢を！

ハムジ・ガー ： それには及ばず、死して屍拾う者なし。これアマルジャ族の古の掟なり。
ルーン・ガーよ。此は貴様の戦い……何人たりとも手出しはできぬ。貴様の敗北は、貴様自身の勝利によってのみ、雪がれる。
泣く暇あれば、強くなれ。強さのみが唯一、貴様を生かす縁（よすが）ぞ。

ルーン・ガー ： ぐっ……。ち……ちきしょおおおおおおおっ……！！

ハムジ・ガー ： 獅子は我が子を千尋の谷に落とすと聞く。我等も同様……子々孫々、綿々と継がれる、アマルジャ族の戦士の流儀ぞ。

至強への道

ヤドヴ・ガー ： き、き、危急存亡！　一大事！　ルーン・ガーが行方不明であり申すっ！
おそらくザゴズ・テーへの復讐を果たすべく、「ザハラク戦陣」に単騎突進、赴いたに相違なし！
我が長、ハムジ・ガーに報告をしてもらえぬか！

ハムジ・ガー ： ルーン・ガー、愚かなり……！　無謀は蛮勇なりて勇気にあらず。敵を知らず、己を知らざれば戦う毎にあやうし。
しかし強き者よ、助太刀は無用なり。前言のとおり、此はルーン・ガーの戦。
私闘の邪魔をするは御法度、これアマルジャの掟なり。
いたずらに命を捨てるとも、それはルーン・ガーの選んだ道。所詮、彼の者は戦士としてそれまでの器なり。
これも定めとなれば、是非もなし……。

ヤドヴ・ガー ： な、な、な、なっ！　そんなあああっ！　我が長ハムジ・ガー、薄情至極！　悲痛絶望！　嗚呼、ルーン・ガーよ……哀れなり！
冒険者殿！　誇り高きアマルジャ族にあるまじきことなれど、恥を忍んでお願いし申す！
どうか、ルーン・ガーをお助けくだされ！　彼女を追って「ザハラク戦陣」に赴いてもらえぬか！

ルーン・ガー ： ち、ちくしょうっ……ザゴズ・テー！　どこいきやがったっ！？
◇◇◇！？　どうしてオメェが……。……俺を追ってきただと？　フン、おせっかい焼きめ。
しかし、ちょうどよかったぜ、頼みがある！
戦陣の最奥に、まだヒトが捕らわれている檻があったんだが、オメェは、そこの虜囚を助け出してくれねぇか？
もしかして……い、いや……なんでもない……。
檻の鍵は「燃犀のムナブ・チャー」が持っている。奴は炎牙衆でも一、二を争う実力者……強敵だ！
オメェに任せたぜ！　俺はザゴズ・テーを探す！

青髪のミコッテ族 ： ……誰？　誰なの？　そこにいるのは……誰？
こ、こないで！　こないでっ！
わ、わかったわ！　アナタ、人拐いね……！　私の……私の愛しいルーンちゃんを奪いにきたのね！？
この子はイフリート様に捧げる大事な赤ちゃん……！　誰にも渡さない……渡さないわ！
あはは、あはははははははははははははは！！

ルーン・ガー ： なっ……か、母さん……！　い、生きていた……の……！？

青髪のミコッテ族 ： 誰？　アナタ……アナタも人拐いね！？　出てって！　私のルーンちゃんが泣いちゃうの！
さっさと……さっさと出て行きなさいっ！

ルーン・ガー ： か、母……さん……。

ザゴズ・テー ： ぐふふふふふ、愛別離苦。五年ぶりの親子の再会は、いみじく感無量なり。涙なしでは語れぬわ。

ルーン・ガー ： ザゴズ・テー！！　てめぇ……よくも……母さんを……　母さんをををををををっ！！

ザゴズ・テー ： そのテンパードは、聖火の加護を過剰に受け、もはや生ける屍、正気さえも失っている！
ぐふふふふふふ、見事なり！　これが「焔神の聖火」のカっ！　さぁ、逆巻く炎で、我に神の加護を与えたまえっ！

ルーン・ガー ： まてっ！！
俺は奴との決着をつける！　オメェは戦陣内の「焔神イフリートの聖火台」を破壊してくれ！
そうすれば……きっと、勝機はある……！

ザゴズ・テー ： ぐふふふふふふ、子猫が一匹、迷いこんだとみえる。貴様も炎の洗礼をうけ、我らが奴隷となるがいい。哀れな母親のようにな！

ルーン・ガー ： はっ！！

ザゴズ・テー ： な、な、な、なんだと……っ！？　燃え盛る我が魔力が……何故……何故ゆえっ！？
なじぇえええええええええええっ！？

ルーン・ガー ： てめぇの力の源は、戦陣に配置された「焔神の聖火」の力！　その祭壇の炎が潰えた今、
もはやイフリートの加護は存在しねぇ。
加護のないてめぇは、貧弱なただのアマルジャ族。戦士である俺の敵じゃねぇ……！

ザゴズ・テー ： ひ、ひ、ひいいいいいッ！！　大慈大悲、情状酌量ぉ！　た、た、た、助けてッ！　殺さないで！　コロサナイデェーッ！

ルーン・ガー ： なんて情けねぇ……。てめぇは誇り高きアマルジャ族なんかじゃねぇ。地べたを這う、薄汚いただのトカゲだ。
……もはや本懐は遂げた。てめぇの血で我が矢を汚すつもりはねぇ。消えろ、トカゲ野郎！

ザゴズ・テー ： ぐふふふふふふふふふぅ！　油断大敵イイイイ！　死ねぇえええええええええええっ！！
ぐふあああああああああっ！！！

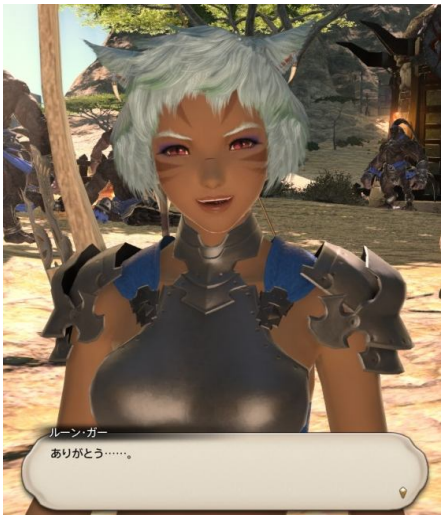
ルーン・ガー ： ハ、ハムジ・ガーの親父っ！！

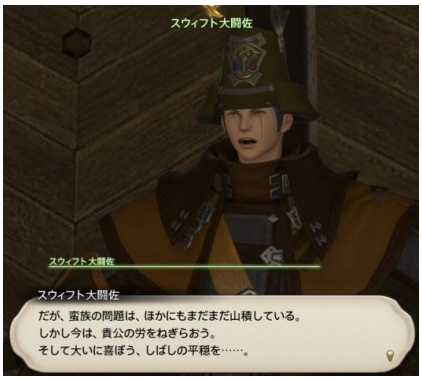
ハムジ・ガー ： ザゴズ・テー。戦士の矜持を忘れ、アマルジャの誇りを捨てし者よ。卑怯者に残された運命は、永劫なる「死」のみ！
戦士ルーン・ガーよ。貴様の戦い、しかと見届けた！
……わが子可愛さのあまり、無用の手出しをしてしまったな。情に絆されるとは、我もまだまだ未熟……
至強への道は、はるか遠い……。

ルーン・ガー ： ……母さん……みてるか……？　ついに……やったよ……。

ハムジ・ガー ： 「炎牙衆」の野望は潰え、ザンラクのアマルジャも鳴りを潜めるであろう。
焔神の火種はいまだ消えねど、我らはいずれ、その加護をも討ち破る力を手に入れてみせよう。それこそが、けだし至強への道！
強き者よ、もはや我に貴君について語ることなし。貴君こそ、至強に最も近し者。
我らは、最大の賛辞を持って貴君を称えるものなり。
アマルジャ族とヒト、互いに憎みし血塗られた道なれど、「灰の一党」は、いつでも貴君を歓迎し、その門戸を開き遇する所存。

ルーン・ガー ： 母さんは無事、オアシスに送り届けた。
一度、テンパードになった者は元通りになることは不可能。だが安らかな時間が、きっと母さんを癒してくれる。
……俺は、そう信じてる。
それと、もうひとつ！　オイ、◇◇◇……！
いいか？　てめぇは俺の認めた最強の戦士だ。だから、これからもゼッテー負けんじゃねぇぞ！？　あっ、それから……。
ありがとう……。
……って、ガラじゃねぇな。はは、は……。
う、うっせえ！　ブサイクなのは百も承知だっつの！　笑うんじゃねえええええええええっ！！



ハムジ・ガー ： さぁ、旅立つがよい、強き者よ！
我らに七難八苦あろうとも、恐れるに足らず。天地神明に誓いて、いざゆかん、至強の道を！

スウィフト大闘佐 ： 報告は、リトルアラミゴのギシルベールト少闘佐より聞いた。見事な活躍だった、◇◇◇よ。
貴公に任せた私の目に狂いはなかった。
蛮族アマルジャ族の「人拐い」問題も一段落し、ザナラーンに束の間の平和が訪れるだろう。
だが、蛮族の問題は、ほかにもまだまだ山積している。しかし今は、貴公の労をねぎらおう。
そして大いに喜ぼう、しばしの平穏を……。